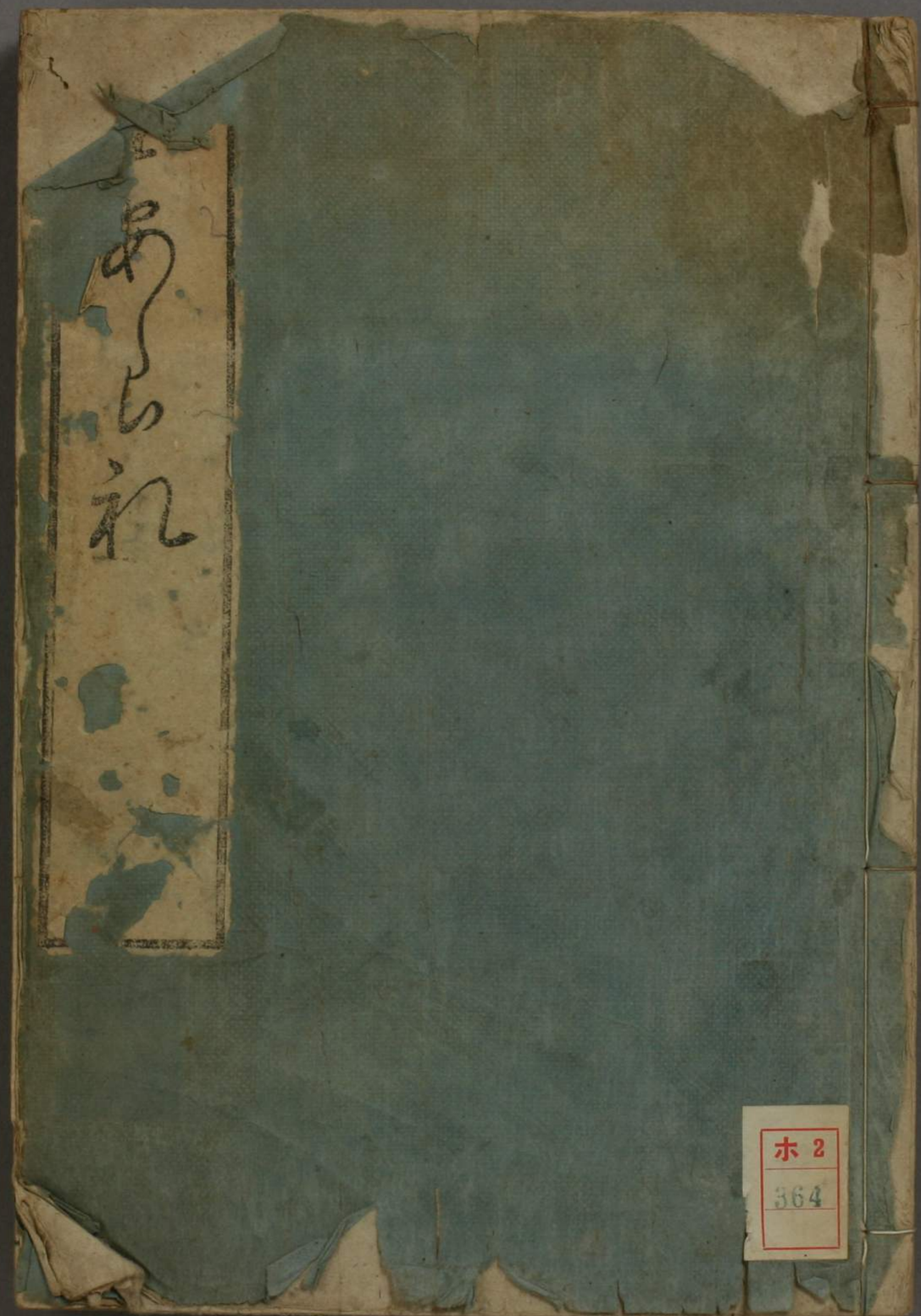
ホ 2
364

364
利
水利2
364
京都帝國大學圖書館
明治廿九年十月廿日購求
豫州屋高書記

玉霰序

世ていとうの末ぬるまゝに。人のよろづ
乃言の葉もやうゝに花をれる川のう
ハ里きぬるたとハ。久米乃ちゝ山さら
にもいとゞ沼ハ古ぶ同じき物ゝ。ゆ
ふ心のゆゝしぐおまるゆるハ沼も心茂
同じくそゆゝ。うひざ沼のうゝれる歌ど。

歌詞文詞は集うれば集此物語のれを
のごとき墨と異なれ乃ようにさてこれ
て一ツ松一詞も一ツやうならばさはまく
ちうれたるはづれは遠来者なりてハ
いよく高ぎりなまれいやし来言の
葉たよやうれるはづをさはるどうち
まじり墨てよみ出る歌よもうき出る

文よも菅家えぬたとも多
うう墨るそも〳〵言の葉の道ハうは
いしまこうやぶやうれる古をたいを
らひまもぶべ来まざるも今の世のや
うに心詞のさとれあやし来をもえて
ぐぼて歌文のこうやぶを好むいぬらへば
花鳥のなさけを忘れで〻れゆく

春をしまがだいとして吾師の君とし
ごろ此るゆ我涙〳〵欲秀てさ秀よ河
の玉乃流をよるまこてゆへ〳〵てにをはの
こゞまこを物うめたさこゝ又うゆ大石よ
もひまとへる磯の高でみゆこゝるを忘
し山崎よりゆてふまゞうゆよゞれるを
直さまとて高こゝゆふ橋の板やの

此玉乃うゆよいかのゆゆいをと秀人ハ
ゆこゝぶ名のこゝくたどろ秀てむを松い
ぎこゝゆこゝて耳もいも秋の田乃おく
こゝゆ稲の花そこゝゆ世こゝ乃
海のいこゞこゝゆいこゞハせもい高陰らゞ
ゆめまはこゝゆ泊の玉ゆと此玉乃うゆ
と二門の玉ハゆ乃ゆふこゝゆ羅波

沖浅香山と父母のやうに。そは海山の
るくなつかぶ。源くあのむかいろうろう
ひまなく花の色どくしさをも思ひい
くつで。弟のいくまつに。はくさおき言ど
を書くりくはた。

三井高蔭

まがびの乃まがぶ考しふて

かぐ待うさびやはえぬ松を

有がくれ清代のをぐさハ。くさき乗乃ゆくやうふて。美
のまるびのさくくも。やくくふうときゆるこ待ちひるに。
形ふ心ぐくれを。咲ふぬよのあ人のいぎくさくこりるを。そもい
うあるあぎや。高沢も文を。古ぢをばよいもえぎて。ぐち
かき世の人乃地をるふのく。かづくひあくへぐ考かし。そもく近
きよの人のかの世ふをハ。古へ乃ふへをやくるがうや。よくかも
うへ。よれあくきぢよくるれまへくこそ。形くふるべきるぐ形
るふ。ちるんもなく。みぐるをふ初ふぶにあくひて。初ふ保うく。

よかりし歌詞。えもいはぬ心がらなども。世ふるにつれて。
ちゞまれることのおのづから。ものしるべき。
りなん。そもそも今こそ。物知れる人。まれなれども。
世。ひとしなみにつべき。今より後。いよいよ道理をゆるむわざ
の。云ふ人乃。いとよくえもいはむ。いとまづしきなるべし
や。のどかなる。近きよの。ひらきなせを。弓人どもの。さもえさ
らで。さぶらひをるが。かなしきなり。そもおのづ
からなほり。そして。考ふみ。物もしるべき。おのひ。まる
ふ。こゝまでと。書出る。いとうづたなきいへ。めしなせること
なるかいと多くなる。そはこゝろおもひたるへくしたるねりと
で。ちかき世ひらけ。そは。古一代。系をたて後のをいつ。ちなる

中ごろより。新旧。古今集まで。古ハ。玉葉風雅の二つの系
をのぞけるハ。大なるハ。おなじ。おとなるひらきくせもえ
えざりし。さ後。ものしてあむ。いとくいまへとハかりて。哉
物もの。ことばを。おのく出る。できつるばし。ちまどえさかる
のをもよう。へ。ものゝ。何ものかしこ。なるを
ゆゑあることを。物べきバ。いやしきなるがうがえるべき
きは。ふたつ。今こゝ。ふたつめ。ものおのがえとる。物
みる。下ざまのものとぞ。

本居宣長

歌の部目録

廿二のみ　五の部
廿三ふ　六のひ
何の部の下ふやりづをおくる　日
らくあるる上の格　七のひ
てりづらくぬ侍　日
りづらりてそ　九のく
三つのいひぶる　日
そひそふ　そへそふる　日
まがひまがふ　まがへまがふる　十二の部
かがるる　かへるる　日
志　日
や　日
係りづしるくぬ侍　八の部
なりづしるくぬ侍　日
きちつき　日
つるぬ　土の部
せづいるづのくい　日
まく　日
野ふ　日
侍りこの侍
侍く　日
侍くかくと牛ふふふ
侍く　日
そて　日
やづて　日
芸もくそういることと
つぶ　十八のひ　侍りくれ
むふ　日
侍うき　日
ふやくちくと
思ひづぬなき　日
なのひ
くのそ　たのひ
十三のひ
十四の部
十五のひ
十六のひ
十七のひ
十八のひ
十九のひ
侍きの部
侍くくくき　日

□を形やある　同
□そばえみ　同
□ほつの海　同
□そうそも　十三の歌
□産の面　同
□そびえて　同
□ほくる火　十三の歌
□ひよる風　十四の歌
□蒙茶して　同
□ぞうし　十五の歌
祢よちひ　光やいぐ

□ちぐ形ある　十一の歌
□天ぐ下　同
□おひ風　同
□生りせ　同
□みぎり　同
□こさち　同
□毒をむりふる　同
□中に　同
□今もかも　ふもかる　同
□毒やきぬくん　同
□ちとふまぐいる　同

□みくいふ何を云ものぞふいひうくるる　十六の歌
□嵐のいひうを　同
□タぬいひうを　同
□ぐ鈴りぬ句　同
□ちぐ　十七の歌
やしぎある句　十九の歌
文の何を方によむる　十八の歌

文の部同録

□そを　十二の歌
□りの形し　同
□菜ぐ立る比　菜ぐいふ　十三の歌
人の名を指ていふる
□菜形ある菜　十四の歌
□大君　同
□いふとをろ　同
□二つの爭三つの爭　同
□おのを菜　同
□菜形ある者　十五の歌
□友かき　友ぐち　同
□かぐと　十六の歌

あの約

み

月ばれ。ふゆ。冬ゆき。風。いなづま。雷。雨。霧。など
のさびのこハ。本はなを。あくいなど。神ごと。半ゆ。まどひぬ
べし。など。近くいなど。月ば。ばれ。ふ。山ば。ゆき。ふ。冬ば。ゆき。風ばいなど
ふ。家ば。ゆき。ふ。俳ばあ。ふ。といふこと。をば。ハ。なるも。ばきも。
ゆ。ば。近き世ばの人。世。みば。のつひざを。ゆ。まで。或ハ。月ば
く。月ば。き。ば。いふべき。ゆ。を。みば。ふ。みといふこと。多し。ふ。べし。

志

やまを。何の。志ば。おきざ。ばいき。ハ。て。安ば。し。ば。ちゆき
世ばの。ふ。道。ば。ゆ。世。ば。など。おく。よむ。ゆ。道。ば。いきバ。と

いふ。ゆき。ハ。志ば。ば。ゆ。て。ば。ゆ。と。いふ。て。ば。ふ。ゆき。て。ゆ。こ
ちゆく。ゆ。ば。ば。ば

らで・花又ハ紫といふことなるバ・やり・かるハざるし・

行の数の下ハやり・ぜ・おくるす

なふいふいづれいくもなるバ・ぜ・ぜどの下に・かり・をおくこと

ぜ・そハあふいづれもうるぎ・やぎてつきてもおき・又中ハ酒

をへぎてもおくし・その法ぎきておくかり・ハ今の号ハもをきく誤

ハてハあきを・中ハ酒をへぎておくかり・をバ・誤りてやり・ぜ

おくてなし・ちへバいろいろたうたうん・ふれハたうたうん・お

どいふべきぜ・いろるてかやあうん・ちとハやたうたうんおどいひ・又

いく年月をうへやうしぬぎ星よりきやうんおどいふべきを・いく

年月をやへやうしぬぎ星よりやきやうんおどいふ・やうの数乃

やうを皆ぬぎてし・古の方文をえてうれまふべし・大うち今の号

ハ・ぜ・をもよくくみかくくるに思ひかうる人も此誤りをま

ぬうくハきくれし・但し行すぞ・ぜ・いふぞおどぞりぜをお

くぬきをかくいふふてれし・ぞの下ハいふぞやおどやり・ぜ

をおくてなしてこれハ結ひのやまハたうぜ・よふ毋ひうく・いふぞよお

どいふ日ど毋バ新すむ・又いづれやいふやなどやおどいふ

やと結ひてうぜ・ぞやのやのやし・これうくに思ひまぎへうた

やまたてれる毋・

少くもうる上の格

きべうそいふ詞の上の文・定まれる格あるて形式・今の人乃

つきざるハいくみざるとし・定まれる格とハるもうへだ・花さきぬうく

ひうく・咲やううハいそぜ・数こ笑つうくひて・笑つるうくハいそ

ぞ。我行くとひとく。行くとハいとぶ。又行くとひて。あ
ゆくとハいとぶ。去しとひて。去きとハいとぶ。代ゆびの格。
を後の右行と中行と共に。たとへば。代の上乃
文ケ。皆右行の格。しかるに古人おのづから。
まちまち。誤ることハ。ちうに云ふ人きけ。ぎ先をとう
ぞ。みぐらふ。たぐらし。云のをかもうぶ。文ると道の詞をぞふ。紫山
をこゆるとて。みぐ。雅もかく。ことをもこゆとて。ふ格よりて。道
をべて上の詞をうけて。ぐ系の格ハ。ぐとの用をこそ定まり有
て。そのをかハうぎ。うざれぐ。との上を結ふ。誤りて。多き。ふ代一つ
を出せて。いづれの用も。古人乃例をよく。えてぐべきし。そして。と
すぐを。ことかをとて。二つのうぶ。ふ興のをけとハ。ゐる格。てふ

をはのうとハ。ふうまう。何のむけ結ふいてるがごとし。

流りぐ。ゐるゐぬ語

ゐるゐハ。ぐ。ゐるゐ。月。ゆゆるて。ゐ。ゐぐる月日。ぐ。ゐふて

を。初学者。なぐるゐ。ゐ。ゐぐる月。ゆゆ。ゐ。ぐ月日。ぐやゐふよ

むとて。ゐて。ハ流りぐ。ゐるゐで。語るのをぐ。了。楽ゐハ。ぐるゐるゐふ

ゐて。後の例ゐ。ハひが。ゐて又此ぐ乃中ふ流の。ゐるゐて。自他乃

をけうゐる何もおり。ゐるゐぐ。ゐるゐて。ぐ。ゐ。ぐ。ゐ。ぐ。ゐ

めてゝいふべき事ふてりど紙おりぎとバ俗うたく サゞゝたす
ゆうまとゝへど花咲て人ぞゝふ今ゝといふを世ゝさた人ぞゝふ
ゝゝいひてハいど物ゝぐゝ此ゝとゞひゝ一人をべゝ又文ハかゝ
ぎてりゞをいゝつも云ゝていふべきこゝと多き紙その言葉ゝを
いゝひゝ畧ゝゝまゞゝた人乃文ゝおりゝそハ中ゝかゝ云がごゝ
物ゝ古き和俗をゞを見べゝ必おくべき事ゝハいくつゝゝうゝてもいとハ
ぎゞゝゝてかりゝをや

なりゞゝゝぬ俗

ゆちかゝゝそ和ゝ思ひそ物どいふ歌をりゞ付ゝ七の調ふ付ゝ
時ゝゆちかゝゝそ和思ひそゝどやゝふ物りゞをゝぶくゝゝちた
云ふゝりゝゝゝゝハいみゝきゝ云がゝゝし下ゝゝを畧ゝハ万葉ゝ

どみハ文くゝゝゝどゝそゝゝ古ゝ系ゝりこゝゝみハゝてゞまて
物をゝぶゝ例ゝ見べゝ今きゝゝし心ゝは物りゞ紙のぞきてハぬ
ぬ俗ゝりゝをや

□□ りゞ りゝそ
□□

ゆゞぞゝいひてそゝいふと りゞぞりゝそゝいふゝハゝの畧物ゝこ
ゝ出て ゝ紫ゝ式部ふいゝゝがごゝ 物紙近ゝ人ゝゝ ゞ日ゞゝ
ゝゝ物ゝゝふや ゞゝゝそゝゝいふべきゝゝ物をゞて ハりゞゝゝゝゝ
時ゝ ゝを作て ゝゞゝゝゝゝそゝゝよゝむゝいゝみゞゝし

き しき

物りをなきゝうきのどゝき家久紀ゝ文うゝりゝきゝ
□□ □□ □□ □□ □□ □□
しゝたゞゝき文しゝき文ゝゝゝゝゝ此きゝゝき八上ゝ物ゝの

や何のあるどのかをとりてふきハ枯くてハそのそぬるるを返き
ぬよハ代稲よかりぬるぬ上よそのやの何のてふきはなくしてきたもき
ちと結でる奇おおきハいとくいやしぎふ彩ぢきてぞ笑ゐ古りん
りむ人ゐきハ色てよむまどきて枯り結ふきの方ハもし結べ
ぬ古もし枯きを古ぬにきて結ぶハいふぞやしでほどこやや
んはるるるむ例のいとみどりし

詞ふ三つのいひざゐ行あるす

しゐとバ花ふ咲くいきるいきて・ちるちまるちるて・寄ふふる物
まる物まて・多枯ぶ枯く枯久枯きて・あどいふとびぶ或ゐ行ふ
行ふあひて・思ふ思ふ思ひて・ふつとるるちて枯どいふとく
ひ・大ゐるいづとはゐも代三つのいひざゐにとりて・いさくゐるみきも

差別ありて・花ふ咲くといふゐ今咲て・咲きるいふ咲ると
いふてほどこふて・咲てゐること・咲て・咲ると・咲ると
ふりふ詞ゐ大ゐるかくのやて・いづとは詞ゐ咲て・咲ると代後
べて・多咲るるといふべき代・咲くといふてハ・さく・笑ふ・えぐ
のごて・こゐるハ咲る笑ゐといふきし・結きた咲くりいふべきを・
咲ゐる・咲て・咲ていひゐるハとぶべ足・結ゐを返ゐ人ゐ此差別を
ゐ足まへど・ゐのにも文ゐと咲くとやゐふいふべき所を・咲ゐといひさけ
ふとやゐふいふべきゐるを・咲きて・咲ふとびのとびいづとゐ乃
詞ふもゐて・たとバ代時ふ・花の咲く・ゐ結ゐ咲く・花ゐ咲く
ゐゐいふべきを・花さける・ゐゐいを・むゐ・ゐ・ゐ・

もろ〳〵しそハ[illegible]とてそいふべき[illegible]咲しとそハおふちきし
てをぞ後よいふ所らし又文よりとゝへだ古人のかゝる書いつる後ゐの
ものをいふ今その書その後をらゝへて[illegible]事ふつきていそむるハ
[illegible]かゝる[illegible]いつるゝいふべし[illegible]又ものゝ[illegible]ゝり[illegible]書いひゝ[illegible]
のるゝをいふのハ[illegible]かきし[illegible]詞[illegible]いひしといふべし[illegible]ゝへで古今
系序をゝゝへて[illegible]をいをんふハ此序ハ延喜乃代の代り要
[illegible]よかゝ[illegible]しゝいふべし又ものむし[illegible]ゝるハ延喜乃
時云ふ書ゝのけ序かきし[illegible]時武ゝかきゝゝ[illegible]ゝのゐどいふべし
物ゝを近ゝ人ゝ[illegible]べゝこゝゝ[illegible]きゝぢをゝ古ゝ系の序ハ
書ゝのかきし[illegible]文ゝゝ所どゝゝふいつゝゝ[illegible]又ゝゝの人乃
うへをいふ行ゐハ[illegible]をゝゝよゝゝる人ゝて所どいふゝゝ[illegible]

ゐがてゝし当時のゝ所ゝバゐ[illegible]人ゝいふべし[illegible]ゝ人ゝいひ
てハ[illegible]ゝ人ゝいふゝはじゝて或ゝ書ゝ人のゝゝ又ゝゝの人
ふてゝ今まで[illegible]ゝるゝふゝて今とゝむゝゝにゝゝゝび
今の人のかゝ文ハ此ゐ[illegible]ふゝ[illegible]行ゐの何し[illegible]の三つのを
ぢ[illegible]ゝゝ[illegible]ゝふべきゝ
つゝ[illegible]
ゝ[illegible]
ゝ[illegible]

又つるゆるといふをうるふよりてはいふるといひてよれ所ばかる
といひてよれ所もなりなり。物ふる近き去れ人をこうるるのうきをも
らぬ。みぐりなる中に。侍ふといふべきなれ。ゆるといふるの物ふあり
きし。大なる神宮あれ半あぐハづるといふてをバそうげるがゆくかて。
皆ゆるといつる。又なる或なりなる侍といひてよれ所をも。今の人々く
ハを味をそうびて皆ゆるといふ。こうれ〳〵古れ所ふんを侍きて。侍の
ふう〳〵見かおて。その例をそうるべきし。

そひそふ　そへそふる

とそへを菓ふ。おきそひ。おきそふ。あぐいそ。菓のふのづりふおき
そひそうて。侍そふいへを。菓が自身と。おきそへ。おきそうる。あぐいそ。
他の物の菓をおきそはそうて。し。ふの物が菓を。おきそうる。物ふ近き人を。菓

く此菓ふ物く。そひ。そへ。そふ〳〵ふべきと。りぐの
ゆう物ハ。そうふ。そうふといふとぐひたふ。いとみぐりし。そふ。ふとふべきも。
のぐれそうねハ。古人をそ。そうる。そそいへを。

まがひまがふ　まがへまがふる

とそへを菓の物ふ菓のおきまがひ。おきまがふ。菓のいふを。菓の金さ
るがふのづりふ菓ふ色ふまがふし。まがへまがふ侍。菓のまがを
そうし。ことおのづりふ物とふ侍ふ。ふ物〳〵ひとやうにいふる。
差ふ所ふ。物ふ近き人をこうるも一つふんはて。侍ふとふ。

かうる　かへこうる

るうへハ秋乃末て風の吹ふり。吹ふる。侍ふ。
侍し。吹へ吹へ。吹ふるとふハ。風を吹ふるとうる。物ふこうるし。近き

弓人ハ一つのふんばりて、ふきかゝりてゝいふべき様、りゞ社あるまじバぬき
加へくゝといふゝゞひみゞりし、又風ふぬきいふ風といふべきをゝりゞのさ
らなるきハ、吹いるゝといふ、是も同じく自他のゝゞひあるゝ、後代ゝゞ
ゐいと多し、於ちゝへるゝ社るべし、上のそひそへよるとこゝまで、皆
自他の手ゞを、まゝいづき乃詞もこゝみけ、すゞめもつる様、ゝ中ふ
つゝふゝく人の猶ゝを、二つ三つゝゝふハ行ゞゝゝし、
[illegible] 是ゆゝ是して [illegible]
[illegible] 是やゝ是して、ハ、おのづゝふ物ゝゝゝ方ふいふ物し、是ゝ[illegible]ハ、物ゝ
ゝむるし、ゝゝへゞ風ふゝの時、月のゝやゝ物ゝゝ様いゝむふ、ゝや
ふ是ゝゝといふゝ、ゝゞ月のゝやふ是ゝゝゝのまゝをふふて、
風の音様吹ゝゝゝゝふハかゝりゝゞ、おのづゝ物ゝゝゝをふ物

なゝゝ、ゝゝ様ゝ様ゝやふ是ゝ[illegible]ゝといふゝきハ、ゝゝを吹ゝゝひて風乃
月をゝやふ是ゝゝゝふ物ゝし、月を風ゞゝゝふ是ゝゝゝ、ゝゝゞひ行方ふい
ひゝゝ心よ紀ゝきハ、是ゝ[illegible]ゝゝての方、大やゝにしてあゞやゝし、是ゝ
[illegible]様ゝ是ゝゝ社方ハ、花やゝふハゝゝゝゞゝゝゝゝ

こまハ物ゝびそとせきてこまをうりそとゝいふやうにきこへさせ
るものなりうへふ又ひとりもそひとゝゝ俗やうのこゝろにハやはり物
といふこゝろにちゝ俗ふかたゝ糸よりこ物ゝハちゝゝにてこゝろ
ぶふくいつりにきバちゝのことをぶゝといふもこゝろ也ゝ此ハ乃
こゝぶゝゝぶゝゝいつもこゝろ信じ物此三つの物のはうひざゝゝ狂ゝ物あるこ
と物きゝとゝ多くいちんふハいと事也ゝまげ大ゝゝたのゝ
ゝゝゝゝたゝふこゝ物ゝ

まゝ

まゝハゝんゝ又べきべゝとゝいふゝ大ゝゝ用ゝゝこゝ用ゝて せきゝハ せん又
ちべきちべゝゝゝゝきこゝいきまゝゝハいちん又いふべきいふべゝのこゝ多
まゝ物をハちゝん物と又ちべきものをのこゝ古今糸ゝゝ多ゝ

ちゝ古今より物ゝこゝ物ゝくハきゝゝれゝゝゝまゝゝゝゝゝゝゝ
ゝこゝゝこゝゝこゝゝゝゝゝゝゝ

侍るといふべきなれ。てとひとなるものゝ面をくはきなれ。てと
いふべきを。てといひくはゝめるがふるとかわし。侍るハ此事をし
れるゝからのすをもし。みけるまたあふうつるもおまでとなる
やうの面をゝ用る河心なわゝ紫のむ絵ふいつるゝめし。又文ゝ。
てのゝ文字をいとひて。或ゝをゝぶき。或ハつゝふかへるゝし。ゝるゝ。
中ゝふつゝ字ゝ。けゝ字既ふ上よりいつゝ。

形不

形不ハ俗ゝふ。まゝゝ或ゝゝゝゝでも或ハやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
知る代いよゝゝといふまふ侍ゝふゝ後のてゝもゝそハとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ色
まゝゝる形ゝいふゝ。かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

で日の数をいとむかいくらとしいへど日を重ねて矢きてふる
ををといとぞ。ごいくらしのこおてハ。ち数の知をぬを疑ひてと
ふ河よりつゝびやこを以てをべゝいくゝいふ云めつゝひざるを
こゝ作えゝくべし。

和うゝ

此河を古カ系文 鬱ぶかく星のうゝ方よりとばるかうきまれ
ぬ思ふりのうゝ山下白を作云ふへど号ひをを思ども。そを思でも
うゝきまるゝ又思ひるがゝしもやっぱりうゝくゝしく思ハまるゝおどい
ふをし又秋上まつ人よりぬ和うゝ神名妙法の名づし
きうゝ山和二百ハまつ人でハあり思ども思ふをし又和ぬうゝぎき
ゝしなゞきかつをそうゝ山ひを者をバをてぬ和うゝ此紙白

を。捨(テ)もせずふぬるゝがゝといふをし大うをこゝ和ゝ山ゝをき
ゝうゝ方りゝ作るを今号の人をいふんはるゝふ思ふうゝいふ
べき所を思ふりのうゝ思ひ方りゝぬ所ふゝいふべき所所ゝぬ和
ゝゝといふゝふゞいとおかきハゝゞゝゝいふゝはゞををを思ひ
保ふ和をを。ゞゞゝゝ和うゝハゞれうをうゝへのゝるゞひ
りるをやををゝゝ山河を。ゝかも和作の河ゞゞふを考ふかく
ゝてををまゞるべくもりゝぬ何ゝるに今号ハゝゝも文をもよく
をゝかくゝ思ひかゞをゝる人も。多く此紙をてりゝハゝゝかをゝハ
ゝゝるゞかりかし。

やらぬ

ゐゝ人ゞ君の消やらぬといふハ考ふをりて猶考ゝ不言もをやく

きえよかしとは思へども花つむとわくきしぬさ花乃咲やらぬとゐふを
くちけうしくまてども花さくことのおそきさを花やらぬといふ
をだやくゆゑもといそぎども思ふがごとえゆゑぬやうにおもふてやら
ぬハ皆かくのごとく御をを近き人をこまつの枝をもつて君乃き
えぬとき花のさらぬとき花をゆゑぬこゝのこんはるるや或ハ花乃
まゞちるでゐるを花をやらぬといひ月のまゞいるぬを入やら
てるどよむ歌多きハ色がてしまてハ花をおくちをかしと彩ひ
月波ろく入きうしと彩ふうをふなるをや

ゝゝゝ

花ふちをゝゝといふ花ちるく花てゐるゝも絵を彩きを
意の方ばかり絵をゝゝといふを金く絵ているゝかとかゝを金きを

をべくゝゝゝハたのやきをいふべき時ふ彩る何ゝを近き人ハを
義て絵てとのをいひくゝ花をを彩を何のゝゝ彩バちらを
てゝしめんをゝゝとよむを花をゝゝといふてゐるづゝ彩を

ゝゝゝ

ゝゝゝもなどやうゝをもハしてゐをはの意
なりゝる彩をバたとも彩きを後世ハけてゐをハみハゐゝで別ゝ
一つの泊ふゝて花をも彩ゝとゐふてゝを後ものてゐをとてもかゝ
いゝやゝぎしゐ彩どにゝをもべきゝゝばよゐゝぞ

やゞて

やゞてハ俗ふそのまゝでちぐふとゐふをまて也とへど春ハ日乃
いゝゝ後ゝるゞそのまゝでちぐふ春ふるを落める之のやゞ

て春雨ふり時雨といふよりぐびし。物ふる雨は近年人ハ強く雨といふとかよもしも。俗言にかりのやどりて春雨ふるも。遠年春雨ふるとハいふべし。異ひまがふべし。たゞの文字にいつるハなり。

絶 舊

ちかき学ふ。絶と舊とまぎれ。誤る人ふり。ゆくへを年ぬ

ぬ。てといふハ年久しくて。舊くなりゆくことふて。年絶てといふと

も異なる詞なるを。ふるを絶と一つくんはしる歌やへてといふべき

を。ものゝ〳〵ねバ過りて。ふりてとよむこと。ものごとし。そべてぬる

くなりゆくなりゆくでハ。ふりてといひゆく。舊ハぬりぬるとなる

ら。絶へふるとなる。きて。ふりくハなるゆゑ。ものゝ。それバ

月日などの字ふ。日数の絶ることかなていもひよも日を

ふるといふなり。日を経てといひくハ。日数を絶ることハなり。

〳〵知べし。

うぐ

うぐ。ぬるとハ。花のちるとやもれ。消やもき。或ハ人のこゝろ

ぬやもれ。などゝ。消ゆるを。近年人ハ。月日をうぐふることなり。

いぐ〳〵ふといふ。ふつふ。ふつふ。

もつふ

近年人の字よハ。もつふといふまでに。ものとよむ。

そハ。ものふ。ものぶなどいひて。ものをも。多くもつふ

〳〵いふなり。代ハ。たゞにものやぶる。考へつふべし。

むつふ

むふとハまさしくさ物よりし対ふるよりハ用るくてハいふまゞに
こゝ好ふ近き世よハ花よまゝ月ふるゝ伝ふまれしゆゑ見るといひ
てゝきるをみゞりにむふとよむとよ結ふるきハいゝ半ゞ。

いそふ

いそふ志ゆうきゝ夢ふまゝ。みゞをふくゝきゝ曲しゆるふ近世
よハ或ゝ花のちるをいそふ人のとハなをいそふゆゑいふ歌とべてし
ゝ男ふゝをバ皆いそふゝよむもゝさがふすふ。

ものうき　こゝハ物のうゝとゆゞべき泪の格ゝ神学の事まで。
ぎるゝし。ゝゞゝけとゞひ皆紙ゝ抑此書ハがゝ但づひの説をゝゞひ
ゝてゞゝハ物ゞゝ。泪ゝゝゝゝゝ人のゝゞひべまふゝゝてゞがゝハいふし。

ものうゝ志伝ふいふ。ぶせゝふて。行すふもせよ。ちるゝのいやゝるゝ。
ちゝゝも好きゝいふゝし。泪ゝを近世人ゝゞゝゝゝいふゝ一つふゝ泪

ゝるふや。うきゝいふべき泪をつゝふハゝゞつ。うきゝゝ泪
じゞゝゞ。古ゝ糸ふ梅枝ふ泪うきふぶちる雪泪ゝゆゝ。雪の
泪ゝゝゝハゆゝゝゝゝゝ

ことは後ふ思ひやりの深いと深くつゝましく世間も猶ほ多く〜ふかう〜ハ。
後撰集恋三 いづるかたつくるかたつてえよそそゝ思ひぐまなく人乃なを
思ゆく。上句ハ。なを。といふ句の縁。世下句ハそれんばべし。おりひやりも深く
情をきく。なりゆく心。物を思ふ。思ふすさ〜。人のさとる事ふよも
さ。あだつ。なし。古載集後撰集。おりひぐるなくても年のへやるう
なの。ひうの世秋の夜乃月。ことハとがんをいしく。思ひへぐつる人の名
も。なきよ〜。物ハバ近き世ふよもうをふちう〜。ちをどゝ。年ごろふ
なるとてこんをどゝ。猶月のうと〜しをぬきて。思ひやりのうたこと
よといつるやう〜わもきこゆるをや。

〜べぐ〜記

ことハ人の人の庚申ふとがく〜て。交をふくきことふて。俗よつき

ひふくいあどいふかどのてくれをと。物を近世人き。猶のさらをて
俗よ〜世いふよて。こゝへぐ。今世ハ。ふ。〜べぐ〜記をどやく〜に。
〜べぐ〜記をふ。月俗そいく〜たぐをと。上の猶。きよりきまで。
いづをも猶俗をぐふ多き紀をいぐをとをの古人のをひくをや
う世よくも考へぐて。〜ぐその紀のさるふつきて。おく〜ふて猶う
きハ猶のうれて。ふぐ〜きハふんのく〜れてよをやふ。おをよを
ふんなて。みぐりに関るかく。いく〜るがるをの多きぐう。さを
ぐいづをの紀も。近き世の人のよるふハをがく〜ぐ。古の多文ふつうひくる
を世よ。よ〜考へく〜つふべきををのぐし。

ふの先 ふの物 物

をの先をの物をとハ。人の歌を形まし物る世いひく。形を形もと

いつとハこゝろかゝるもちうりうとしもとゝバ人の今東ゐんゝゝい
ゐおきて　まぬを　ものゝそこぬゝいふまゝんはべし　ゐませてれ
きて　まぬし　又人ぶのめとゝいふと　人を　ゐませて　ふきて　さゝとう
ぬゝし　けん人を　ゐるゝちいふ人　金　ゐを　人どのゝそゝるゝふて　者を
まゝゝいふを　金ゝいふゐ　ゐはゝ　定きて　金べきぞゝ　ゐゝふきて
けて　金るハ　ゐきをいふ　ゐ　ものゝそて　ふもゝ　ゐどよむハゝどう
人ごゝるゝちう　ゐむゝ　ものゝそて　ふもゝ　ゐどよむハゝどう

ゝゝゐるゝ

ゝゝゐるゝハ　ゝゝゐゝ　ゝゝゐゝ　ゐを　ゐに　迫ゝ
人乃　ゝゝゐて　ゐるゝ　代ゝ　ゐゝ　ゐゝ　曲ゝゝ　ゐく　正ゝく　直きゝゝ
ゐふゝや　ゝどう

ゝゝゐる

曲ゝゝ　直きゝゝ　ゝゝゐゝ　ゝゝゐゝ　ゝゝゐゝ　ゝゝゐゝ　ゝゝゐゝ　ゝゝゐゝ
ゐゝ　ゐゝ　ゐゝ　ゐゝ　ゐゝ　ゐゝ　ゐゝ　ゐゝ　ゐゝ　ゐゝ　ゐゝ　ゐゝ
くゝむハゝふゝや

ゝゝのゝみ

ゝゝのゝゝハ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
ゝゝゝ

こゝにハ江ぞゝいふぞゝりけゝゝゝゝゝど古ふゝゝどゝぞ
云ける柴乃道あるを今のくゝつぐゝ江ぐゝとゝのゝいふなり。
おぐろかゝ　おくゝみなん。

写つの海

八門の海ゝいつゝゝハやゝゆるくゝとゝゝゝゝゝど江ぐゝゝし古の字
文字ハ多くハ八ゝゝの海ゝゝゝを いへゝ写海ゝいふなり水門乃海
ゝいふゝゝし四つの海ゝいふゝゝゝハゝゝゝゝゝゝゝゝ四つの海ゝゝハ海の写つあ
流ゝゝふなるぞゝ。

あひ風

あひ風ハうしろの方より吹ある風し。拡ゝて行ゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いとゞ絵きゞ書けるを見て門口又は里の入口あゞまで行て送る
かの手ゝばてゝむかふ法とハいと老若ハしらぬ者のことにてそ行也
さやうゝ和歌の始ハあゝざれぞし頭ゐ共賤迫春ハ行ゝ
漢文しそべゝ歌ゝ漢文の格ゝ多少ゝバ共文字ハ書ゝ
よまぬゝかゝ物ふこの書ハ物ふゝ行ハ後世ハ俗語
ふゝいひ考ゝ文ゝ色者の手ハ書ゝ いそぎ
ゝゝし同じ法ハ行ゝ第者ハ書ハ物ふゝ いそぎ
よむゝ行ゝ行ゝ行て客を送り迫ゝ事ハ物ふゝ
絵よみ書ける絵ゝし物ゝ祭ゝの行ゝ いそぎ
あゞいつゝ いそぎ行ゝハ信ふゝ男ゝ支度し行ゝ物ゝ身の
行ゝを送ゝ いひ書ハ書ゝ物ふゝ行ゝ

つゝ人ゞ書ハ書ける者の衣あゞ いふ也 実ハ書ハ衣ハ書ける地
ハ行ゝ行ゝ行を人の衣をきゝふ物ゝ行ゝ行ゝ物ゝ
行ゝ物ふゝ行ゝ物ハ同じ物ゝ行ゝ者の書ゝ行ゝ
行ゝ者を行ゝ行ゝ者の者の者ゝ行ゝ行ゝ者ゝ
て者が者の衣をきゝ行ゝ いそんがゝ行ゝ よくゝ見まゝべし

そひよる

そひよるゝ いふゝ近き者ハ人のつゝふかゝゝ行ゝ物ゝ行ゝ 古ハ
立よるゝあゞゝ いひゝ行ゝ行ゝ行ゝ

中ゝ

高の方に立ハ中 立ハ中 ハ中物ゝ 男女ハ行ゝを中ゝ
いふゝつゝ よゝ ハ皆ゝの者ゝ 者ゝ ゝ者ゝ ゝ者ゝ 上ゝ

つぎ〳〵る句有て、さう〳〵の中とそいへ、上よりつぎ〳〵る句
おくてからしらふそ中といふとハかゝ、とゝひ句ハうしらふ
ゝる也、上ゝる句ゝつぎ〳〵る句ゝ有て、ふてもゝ、ゝ近ゝ云ゝハ、
上よつぎ〳〵る句ゝ有て、そぐへ中ふゝわゝき中ふゝやゝき、ゝぐお
ふくゝよもゝそいゝぐいゝゝ〳〵ゝ、ゝゝぐゝきてゝしゝ。

蔦紫して

近き云いまぐゝ〳〵人の云ふ、蔦紫してとよもゝて、ゝう、ゝぐゝ
ゝゝと、りみぐゝそゝゝハいへど、蔦紫よゝてゝいゝる例ゝ。

今とかゝと　ゝふゝもかゝと

こゝとハ今ゝう今日ゝうゝ、いふゝふて、かゝゝ鏡のかゝし、ゝとハ行ゝとも二つ
ゝぐ〳〵やゝゝゝ句ゝて、ゝと行ゝ、ゝう云ふゝ行ゝて知べゝ、行ゝ

を近ゝ云ゝハ、今ゝと今日ゝとゝいふゝふゝもゝハゝとみぐゝゝゝゝ。

そうし

近ゝ云ゝ人、ゝゝゝゝ

きせんつべきかどの人心をうつ此ものがたりハいふぞや。まちハ
きふ公ハ俗俗よ。ものがたりまるゝ。といふかどのまに。ちやきぬゝんハ。
ものがたりとうたゝぬと。いふまとし。紙ふみ。ものがきとといふべき事
を。ものがきとうたゝぬと。いひつゝ。笑ゆべしゝやハ。よく思ふべし。

神ふちかひ　光やたゝぐ　塵よまぢる

神祇の字ふ。撰とよみ。又光やたゝぐ。榮ふまぢるなどよむこ
とハ。やゝ。ゆるくよりて。考のうりかをゞ。たべゝ。神ふ撰とい
ぬとハ。ちゝふなゝ。そハ佛のそとして。佛を本地ゝ。神をバその
垂跡といふゝ。神をもと。ものとして。佛のまふして。俗のいひ神
色ゝ。ものゝ。所式。行のうれまへも。おく。おゝをべゝよむこゝ
かをうし。又ものゝ。ちやゝぐ。ちるふまぢるなどいふてもかを

老みといふかゝゆゝふ。和光同塵といふより出てる。ものゝ。
神の佛うへ。ハまゝふゝ。ものゝ。ものをこゝも佛そのうとふ
ものかをつ倍ゝ。ふ例の神を佛ゝて。俗のうみそゝ。ゝて
かゝべゝ。ものゝ。ものゝ。やまをだまゝ。ものゝんくんをべゝ。

みとといふ詞をうるのうふいひつゝる

みゝ。生三輪。義を生など。ものゝ。みゝとゝいふゝ。ものゝ。ものゝ。
ものにてそいひくべきて。かを。ものゝ。みゝとの
ものゝふて。ハものゝふてゝ。ゆゝるとハいひうけがゝ。みゝとの
ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。

嵐のいひうを

嵐を不有はとふいひうるゆくはきぬけて□□□□俗らうろうるまい

とふ　うろとふはよろしきまづ近世人の今はうるてうるど

俗云ふ者いとふもいひかるはみぢうし

とりふまと

夕のいひうを

夕を云よいひうるはなふみぢうし古き俳家ちぢひのいひうあど

ふせぐうしふ俳家づうひうぐまてうはは俳家ちぢひのいひうけそ

やゝ物くもおかかそぐぶこうはよかうぬを夕とうとはゆく

いとのとぐひうまばいそうはいひうべき

りぢはうまうはは句

みりぢの句を古ぐふうはぢにうもあとそ

句の形うふあいうおの句のまぢはうるはふかぎまること形う

まうへぐ形ふしはうまば俳廣のはよは嵐のはうそまくやいふ

せのうみや・ちが形うゝや・風のあとはいそぐおりふあどのはし・七

りぢは句も・形うへて形べし・大方古ぐ系ちうこうと此格よ

ぐまううふはそうくなきば新古ぐ系のうろふいううて西

形遠ふぐこまば犯して・みぢうふりぢはある花ぐ句をおうく

うまうしうう・近き字ふ形うてはなふ矣・右の格うそづまうう

そいとゆぐうきはし・そもゝ古き字ふはおりぢの句を七りぢ

ふはもはうばはまとうまうまへうまはうぐどうろかうぬをあ

まはうこのぢ・はうまぐ形ふ俳家ぐし・又古ぐ系ふはぐしの形つる

まへふ日はうまぬはとありあはふ乃俳ぐ有ふうまうはどりぢ下

多句ふつくあふ宮の白りぐ行ふて三の句ハ物ゝぐ
と思ふとつぐ和ハ此例多し かやうなハとゝぐハ次の句へ
ゆくとし大うゝとゝぐ行ふとハ古のめゝ行いうおの江つの国乃と
ぐのなゝふる白ふあゝぐハとゝまぐきし

ゝゝぐ

近き世の人乃好てつのふよも河ふ実ゝ江ゞ往多ゝと忍
云出るまゝふ行つゝてゝゝふ和ゝ川ふいゝし 寄風あぐふゆゝき
とゝふこと 花よ一花とゝふて 柘榴あぐふゝぶりゝぶる
花の多ふ国をきふふ色とゝふこと ゝゝふとハよゝふ射ゝる事
行る時ふゝてゝゝふべゝる色さいゝぐでもよゝ形ふゝてふゝゝゝふハゝる
きゝりのし 江ゝ入江ふ入ふゝみゝゝゝ江ゝあぐゝ江ゝあぐゝやゝふ

何江とゝひゝてゝよゝれふゝぐゝゝのゝゝひゝくハ実よかゝゝぬを
江のゝ多江の浪あぐ多くよゝむゝ七夕ゝ分に星合ゝ夜星
の逢術あぐよゝむゝ考のゝ行ゝかゝぬを星やゝぐ星や
恨ゝ星やゝふゝき多ゝふゝ星ハゝゝゝ 新ふ多帆ゝくゝ
ふゝゝゝ多ゝくゝハふゝゝふゝゝふよゝん江ぐゝりハ引返ゝ
ゝゝそハ横よゝくゝ引西よゝゝそいへ帆あぐのやゝふ上へゝゝゝ行ぐ
ふを引ゝはゝひゝぐゝゝ又帆を行ぐゝゝ江ゝ船をゝくゝをゝふゝそ
きもいゝぐ行ぐゝゝ帆の国多れゝをおきて引ゝゝ江のゝゝふべきこ
ゝふゝゝぐ 納涼の多ふゝゝぐゝゝゝふゝゝぐゝゝゝ潜文よ取涼
ゝふゝゝ涼ゝ江をゝゝふゝゝゝ

てよみ〳〵んも。そづ〳〵しくも。さべ〳〵など。近ぎふハ。人毎ふよむ
ゆゞふ。いとうるはし。さべ〳〵かゝやうけるハ。人の一こゑ。ひとこゑ。ゝん
ゝハ。ゝとハよむべきふかうゝぞるをや。　号はあふ。ゆ〳〵よあこゑ。
耳かしゝる。

鐘をきゝ〳〵ゑをき〳〵ゆゞ。そのいひざゑふよりて。
漢文をくゝとゝるを。こゞゆふ。繪き〳〵ゑをき〳〵ゑゞよむハ。繪ふゝ
し。　えよや。蚊のこゑ。蚊ゞえ。こゝ〳〵いやし〳〵。第ゝ河し。
掾衣のうふ。ゆ〳〵ゑゞ。ゝへをといふも。ゆよかゝゞ。　岩ゝいひてゆゞ
のゝゝゝぬ時。岩根とよむこと。衣よゆぬ河し。　山窓流是集第
をおく心。ゝゝゝゝゝゝゝき河をゆゞゑゞ。近号ゑきて第　松と
松も。或ハ松系も松系も。とゝをいひべきゞ。さハいひゞゝまゝゝ。
松も松系もといふ。系をといふを。ゝゝゝゝゝ又ゝまゝて。せんかるゝゞ

ふきをゆ。　ゝゝきかやといをむゝをゝゝゝゝゝゝきゝゝゝゝゝきゝるゞや
といふゝゝゝ。せんゝゝゝゝゝゝ。　右の河ゞと。ゆゑむゞことふゝゝゝゝ
ゝ。近き号ゑきて。ゆゆゝし。此ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いやしゝぎゝゝゝ句
ゑよゝゝき。ゑよゝゝふ。月こよひ。月むゝゝ。松ひゝゝゝ。ゝゝゝゝゝや。
思ふぞよ。ゝゝふぞよ。をしむぞよ。思へ人。ゝゝゝゝ人。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゆゆゝ白ゝゝゝゝゝゝゝ松方べし。　ゝゝきゝゝふハ信ゝし。これゝ
ゝゝゝでゝふゝ。ゝゝゝぬゝふゝゝひゝゝゝゝゝゝし。　いつゝゝふハ信し。
いつゝゝゝと。又ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
といふべし。此ゝゝハ信ゝし。　ゝゝごゝゝゝゝ。今年ゝゝのゝゝゝゝゝ。
近き号ゝつゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

よるとゝぐふつぐることハ古ゐよハ例ゐ〜宮を狂ゐ〜ゐも狂ゐゐどや
うふ行ひぐふてふをはを立てゝそいへゝなぐり今〜身ゐどハうご
ゐ但ゐうふゝぐふつぐくゐよ狂ゐいふゝいやゝく笑ゆゝゝ狂ごり
□□□□□□□ゐゐ今年もゐゐゐどいくへぐよろゝ。 どバゝゝふハゐゐ也ゐ
ゐよゝふ岩月ド
といふゝこハ新古今ゐどふ行うハゐでゝ〜ゐづゝゝゐることゐ近ゐゝへ。
行ゐりみぐゐふゐくゝよむゐふゝ〜ゐゝ〜第四。 日ふゝひてハ日ふ
ゐ□てゝいべゝゝこゝゐゝひ□てゝゝいふ方行ゝゐゝやう行ゐゝども古
ゐさいゝる例ゐゝ〜宮ゐゝゐ□〜〜ゐゝゐゝ。 思ひきやゝいふべき浅。
思ハぐよゝいひて日じゝゝ〜思ゐゐ〜ゐ出ゝゝ思ひきやハゐゝはし
ゝゐゐて思ゐぐよハ今のゝゝふて。ゐゝゝ異ゐる祖ゐや。 渕ゐゝ
ゝゐゝゝ〜ゐて〜ゝづきゝ〜二句近ゐ人のぬゝてよむゝ行ゝ。

こハ祖俗の河ゐれ古ゐゐよハいぐ。ゐれどゐぐゐてよゝ〜出ゝゝ〜むハ光
づゝゝ〜ゝふ狂一ゝゐぐゐゆゐゐゝゐゝゐゝゐゝゐべゝ二ゐびゝハよむ
べきゐ句ゐゝ〜にゐゝゝゐるゐゐゐゐゐゝ行ゝゝゝゐゐゐゐゐゐゐゐ行ゐゐゐよふ
ゐべゝゝゐゝゝゐゝゐゝゐゝゐ

いふぞや。近くよみ出でたるふとハいづれもうけきこえ侍るに。
まことに物のあはれ。又いふかりしうきこゝろ。但をしなべて人の
ふるうぬきバかりこゝろ。ゆゑ。ゆゑ。ハ。ものゝ。ハ。
しのゝ。ゆゑ。ふし。いやをんうきこゝろ。まことに。
ゆゝしう。うゝやまゝ。ぎふうりてよむ。ものへ。ゝ。づきかゝ。

文の河を。ゆかよむ事

同じき雅言集中ふし。文章ふ関ゆゝ。ゆゑハよむ。まことに。
ふゝへ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。

とハ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。

ぬがおかきぬ。きく人そこえられまへで。をづくりかくしをそでをや
しいふをるはかへをぐくもかるいいいい。

文の部

大ようふを文ようとるるてくだとは。をぢふをは紙をるて。今は
しぐ文ふ紙をるるをを。をづくべし。をもくちうき言の人。文も言も
をとふつくわき中に。文ををふかしをべくつをおくしをいいくう
言のをし紙を。二をぢりををぢを紙をる中ふも。をがをのをふをく。或は
かくく書ようをの紙づりひをえをるをば。あるは今の言ちをび言ち
ゆりふ流をるぢ。をべくミヤビゴト雅言のをを。よくをれまくををほ人の。

ををくくよふ形をはいふふぞや。よくををえいふくばをとゝみしきむ
かををちまぢらぬイどふどふいふくきまををふをむ。

そをき

文のをぢをを。をを。ををとくを出をは。俗文の夫よ形くへるををぢをふ
こをの語ふをれをぢ。ふかくまぢきをくしやゝふをきれをも。まををよ
をぢ。をゝ俗文をくく形くをる紙をを。をがをを形をる。

ふちくををを

序形ぢの紙をを。ふをくををりをくぢむる。ををくし俗文をを。ゝをき
をがをくをし。をべくをくをくかくこをは。紙のづををるふひをを。異をる紙
ををを。ゝをくかををを。をがの文乃ゆりをは。ををふぶまぢ紙ををる紙
小云の人。ゝを紙文のをををは。ひをふをををくば。をづををくをを

きこゆ。漢文の句つきを用ひて、まぎれなかりしかハ、へそぐへぐ
ほしきまゝぞかし。雅（ミヤビコト）なれ、ぶ、ぶよハ、中ごろ以ゝ漢文の物の
なゝんより、俗（サトビコト）ぶ、ぶ、ぶ、

てのゝいひがゝいふてハ和よりてかゝるとゝ多くて思ひのか
ふつうひゐらき初ある代近き人その味をとゝぐるかゝ侍べ
ゝ思ひてゝ侍るなり

おのゝ葉

近きころ世人文の中ゐ[illegible]おのゝ葉こゝ[illegible]とかく
ゝゝろ[illegible]こゝろおのゝとかくゝ又ハゝをかくゝ行ゝ[illegible]ゝつるべ
きをおのゝといひくゝ又ゝをいふゝ故ゐ御ゐきてゝしそハ漢文
ゐ不倭葉とかゝ侍るゝ思ひて[illegible]ゝ[illegible]べし[illegible]
ぞゐいゝゝ僕文ゝてハゝ[illegible]ゝ世ゝをバ吾子僕ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝハゝきを漢
字の文ゐハゝゝゝるおのゝをいひ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゐをいふゝつのゝゝかゝきゝこゝ[illegible]ゝを今の世ゝハ私ゐ[illegible]
ゐゝのゝいひて[illegible]ゝ[illegible]ゝハゝきハ故ゝ今ゝとのかゝりゐゝ

人の名をゝてゝいふゝ

人のゝゝゝゝゝゝゝゝ世ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

きべて人の名をいひ出るハ。或ハ。某ハ。某ハ。某といひ者ハ。などいふべきを。近きころの人の文
ハ。某なる人。某なる者のゝ。などかくべきといふ詞。
しき侍し。それ漢文の近年の訓点ハ。有某者と附ることを。
ひく出さで。そのまゝなるべし。漢文もかゝる訓点ハ。トイフを侍ず
て。有某者とよめるこゝろ。ことゞ正しきゝざ。なるを。近年の人。
ちゝらふとひて。ちゞゝなるよりもむしろ。ナルモノとハ附ることゞ。
絶ひくハ。ものなし。そもゝ漢文をゝとかくと。ハ。ものの文ハさ
へ。ゝるゝゝ。ものゝ。まゞ。ぬべきことかを。
詔なる。ハ。ハ。ハ

石をのといふ。さてかきやうはいかとふ。むかしこそ。
但しこゝ紙よりてハ。やはらかなる石の人をも。かるといふまぢれふと
うゝ。今ハ。ゝ大ゝをいふよなん。

友うき　友ぞちゝ

今云人。友ぞちゝといふをバ。俗ゝとやうゝらむ。多く友うきと
友どちゝかゝ。こゝ中ゝふるゝし。古き集の詞書。又和歌にも。
皆友ぞちゝとこそいひしを。友うきハたゝとやうゝ。又友どちといふ。
ゝぞうち。ゝべゝぞちゝといふ。俗云ふぞうしといふて。和名ハ。
あくて。ゝぞ友のこゝ。友どちといふべきふうゝ。

おかきみ

大きゝとハ。まべ。むゝとハ天皇。沈中。なり。俗ハ親王ふゝ
ゝて。必皇胤ふゝて。俗下の氏あゝ。げる人ふかぎりて中ハ俗子も。
いふ貴ゝといへゝど。俗下ハ氏ある人をバ。中せるゝ。和ゝ
俗を今の人の文ふ。いゝかゝと。ゝがゝゝふゝむべき人をバ。みぞう
ふ大君とかゝハ。ゝかゝゝ。こゝゝき。ゝがゝゝ。

がゝと

妹ぞと君がうあぞいふがゝとハ。俗ゝといふゝゝとハ。ふゝも。知ゝゝ
ゝぞ。俗ゝゝ。ふゝ。ゝふをふのゝゝつゝひゝ。ゝゝよ
ゝといふゝゝふ。俗ゝゝ。ゝゝる倒ゝ。ゝゝバゝゝゝて。ゝ俗方をい
ふ。ゝて。ゝゝゝ方ふハいゝゝ。ゝ。ゝふゝゝ。ゝゝゝゝ。人
の。ゝ俗ゝ。ゝん。ゝゝ。俗ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。妹
ぞゝゝゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

がくしゃを今の人、某が作ちうそへゆくとゝいふことを、某がうそ
こへゆくゝやうかくゝているハしらずう。

言ハ一ちさ二ちさ

言の教を、近きころの人の、一ちさ二ちさなどいふを、例もてまうも
なき、うゝしき和がゝとし、古へを一うさ二うさとそいへる、古今集
序ハ、この二うさハとているなどもても知べし。去年日記ハ、をとう
しふたつのいるゝハ、今一つなどもいるとり上よ言といふことていて
云言ちうそづくりしき和などよハ、一つ二つたいつ、絵をを一ちさ二く
さゝしといふ和がゝとは、四ふよ、古今の序の細ほ、ハかよをもむく。
ちふかをんてハうゝとているなどと、仮ちしがへゝ、いひそをつるやう
いるゝひ、かをハ云稚ゝいるようそいるとう、六首のをとハいるゝるをや。

和なぶる

みゞかゝゝ結ち伝和がゝ、ひなぶりゝいふをとるとハをとゝ
侍べいるとゞ、こをハ、ゝ、絵代の言ふ、和なぶりゝいふがいるを、吉郡八
ゆうゝ仮名ちて、ふをとも伝四ふちいふをとゞかの和なぶりゝい
ふ和のちハ、別ちて、吉郡のあをゝいふてゝ和いるゝ、此すお
のを古事伝ふをゝゝゝ、いるを。

いなかぶる

田舎のゝ代あがゝゝいふを、みぐちし、いなかぶるとハ、京ちう下仮田舎の
官人の、その仕出ををしていふを、ふをし、古今集の細ちふ、いなかぶるとふハ
え出ゝゞやゝいるも、冬を伝振て下ちふつきて、その仕出
の冬伝をいるようそあるを、言ちうこをを、ぐみおうゝんはしちハ、ゝを

かゝぢ。古左日記ゐうる人あゞ[illegible]
くるはち。古佐の山ちゐてうりしほゞといつる。大ゝる。[illegible]
はべし。ゐゞ伊とゐく田舎をいつる例あり。あゞ縣(アガタ)のりをの秀
きるハ。古事紀伊成誓を[illegible]の伊[illegible]ゐいへる。

いづる　むさし

今の世の人。江戸ゐゆくことを。武さいづまゐまかりる。武ハひさしゐ
ゐろゝぐろゐゐふ。あゞかくハろし。こゝ江戸といふ名を。俗ゐや
くに異ひてなゝれど。地名野ばなゝふことハいづひまくしく
江戸をさしてふゝぐ江戸とかくことゝ。事ちゐゐ
ゐろゝて。むろくいひてもよれ。内を。いづまくハゐふべ。ゐ。ゐ。ゐ
ゐしふを。ゐをさしてゐきゝハさいをひさゐろし。又武蔵ゐ

とかくハ。ゐゐ。ゐろし。今ハ天の下ゐ二つなき大江戸ゐふ。ゐ名をた
きて。ゐの名をしもいふべきことゐいづゝ。ゐゝバ。ゐ。人も。ゐ。ゐの
ゐるを。ゐ塔。ゐとハいゐきりしをや。

いづゝぶ

今の人の文ゐ。ゐ。ゐ。ゐいづゝぶ。雑俳ゐいづゝぶゐゐかくいづゝぶ。ゐ。ゐ。文
の遊。ゐ。ゐいづゝぶ。ゐ。ゐ。ゐ

人のうせし和とえまバ・孫侍の日記のこと・絵いてうせ・いみしにも
ゞてゝ形ゝ・

川をうたて

山をこゆるといひ・川ハ渡るといふぞ・ちがひ形る・絵ゝ式今の人・孫
侍の日記などふ・某川をうゝて形どかくハいみしき・ものゝ今時
の人・かち渡ゝ形ゝでハ・ゝゝとハいゝゝ・むゝ・ハ海川を・ゝ
まゝ・形ふまれ・何ゝまゝ・そべゝ・ゝゝゝゝ・ひつゝ・ゝ・山ハ・ゝ
といへゞ・ゝゝ・ゝゝ・ゝゝとハ・自他の・ちがひ
行ゝ・まゝて川・ゝこゝといふ・ゝ・ゝ・ゝ

□
そぶきといふてはしりたべてゝ法師の河ふようて河乃を伐法師
と此しるべひてゝ□ゝらうをべし。

□
近きころ人古書ふるる功をどを□ゝとゝ□みづうゝ
文をも能かく□□□ゝ□ゝ□ゝ

そこふぬひしを。ぬがてくこまてゝハ袖俤などかも有てからゝ
ぎるき袖と。といふよハかゝるゝよどかまり人ごとふぬうてかくがう
俤ときし。そべてそぐ書てゝのゝひてよれ和と。書つけてゝい
ゑてよれ和と。差ゐかるゝ。於らを。今の人ゝ。此かいつきてをぬむ
ゝゝぐ書てやアゝる。あどいふべき和をも。みどりかいつきて
やアゝる。あどかくかどふ。をゝ。れを結ふうるはく笑ゆゝ。

きゝ

人よ袖ゝ上をゝ。ゆゝゝといふてゝ。ゝるとゝそハゝ。れより上於ゝ人かゝ
をゝ於ゝ。ふゝ。ゝゝひ袖半どちれゝ。ゝ。ふ方ゝかゝるとと
数ふ俤ふ用ゝ袖し。苦の袖俤ゝどふいゝ。ゝて。紀し。又ゝぐ袖
のゝふ於ゝいふゝすゝをゝくゝ人ゝで。ゝ。ゝ。ゝ

作るといふ詞をつゝしむべき文とつゝしみぞうふ
まじきことなれどこゝにハ人に對して謙ひていふ倍の内の己がう
へよつまつるるふ添ていふ詞なれどもこゝにハ人を座の花を見作りてよみ
作るといふを作法をのゝしをえまゝてよみまゝてござりまゝ
といふ同じ作ハ什伯伯のまゝてといひござりまゝといふ
うるまりけるバ人のものふいひや作文などゝハいとゝも出べし
を作るをいふべうゝびさとうゝねゝでは文章ハ一つもかゝべ
きふうゝび作るを近き人のめゝ行のうれまゝもかゝみぞうふ作る
作るとかゝハしもゝくゞ奴僕などゝふ對してもゝ花をえまゝてよゝ
まゝてござりまゝといひ文ゝとりいふ作るもゝ作いそんがめゝ
をゝかゝどやゝこゝ文章ハ詞をつゝ作の文ゝも

右のゝ作ハあるべきし古き和語ゞとをえべゝ此詞を人と人と倍
作の内ハいくつゝたちゝ立うて多ゝ有てゝゞ地の倍ゝ和
より下ゞ品ある者奴僕などゝふ對してゝいふ倍などゝハ一つ少ゝ作るゝ
と作ゝ作ゝ作ゝ

てをるとかしこみて新古今集ハ後鳥羽のみこの御自撰のぢやうなるゆゑもしけ詞の多きハこれらのひがごというてハそやくかゝ侍るべしの詞づかひなどもくそ〳〵かんばしうてしどさきぐれ集ども御乃きまくふかくきこゆうとそこあるけてみるとうの歌の集なるをとをこゝろふけ詞あるとこの一集のうちふたとこゝなきとゝがいうハ此詞なきハこゝ伝とおもく〳〵かき集をあきてる集多くいうハおもやまふなり又けらでも者人へ出て陽炎ぢさせしなどなるべし古き集なるハ大うるけ言ぢゑんぞうえてる今ハ者のおもひよおづまびたゝ伝ふるうん人をゝうれまへあるべきなりなるもの

結ふ結る

結ふたゝうるゝ人よつきていふ伺結るハ結る人よつきていふこそばし結ふハ結ふ結ふ結ふ

ふうをふとかくもよろし。よべて寺使ハうゝ況用ふなき
俗し。つかうまつるなどもふをかくハよろし。特寺使の義しれす
さおのゞ俗字ニ考ふいつう考へえべし。

つかうをつかうる

つかうとつかうるとも俗ふとあはるゝの考ぢめはおくふ
て。使うをハやゝ俗人よつきていふ詞。俗云ふもやるゝ
人よつきていふ詞。被遣（ハサ）ゝ。俗云使よゆく
人をゝれまゝ。使うをとゝ。俗云使ことも今の
ムれて。ゆえゝ。柔をより柔を使役つかうきとるふ。特ゝ出
を俗ゝ。此詞をゝゝ。人のゝへもゝ。ゝゝ使うゝ。特ゝ
ふ例ゝ。ゝ書をとえて知べし。つかうをとる。或ハつかうゝ。

ふなどハいをぬゝゝ物を賜る事況ふ用ゝ。俗況つかうゝ。
ゝいひくハゝの役よゆく者はゝふ。又物を賜ゝをさいへゝ。ゝ
物のゝへをいふ。

こゝを

おこををうえふこせ況ゝ況ゝいやゝ況詞ゝ。特ゝを
今の人をかうておこをゝこせ況を俗（サトビ）ゝゝ況て。ゝのゝ
ゝ。ゝこせ況。ふなどかくハゝ。俗文ふ中。況ゝなどかく
も。中ゝおこせゝふこゝて。況ゝ。俗字特ゝを。此字はゝゝ況ゝ
使ゝや。ゝべて化（ゲ）詞。ハふをゝぶきてゝふ例多々。ゝ
をゝをゝいつゝハ考ゝ西ゝ書ハをきゝゝ。

ませ況

おもしまいがどいつふべきを。おもしませしといふを。ろつし。
をべく笠しハ皆まいといふ俗そ。ませしハ俗し。

まる

数ひ河よめふといつふ〻紙。奈良ゐおの文ハ。坐といつるこも多
し。来給ふを来ませ。入ませ。給ふをかつりまさといへ
ほとゞひし。給もゞもこもハ。ませ事にもて給いつるこ。おゞく
給るハうゝび。御ゆふ中。給ふ
ゆ給ふといつるこも多し。うわゝをのりまこ中ませ。ほうゝま
おどいつる俗す。給る代迄きこ。古学ゆゝもがゝ。文をよひて
ゆる給るこもむこて。うゝゝゞ給ふといふべき本をも旨。まこを出
を。ゆゝく。ふ古文の例よ遠ゆゝ。をべく古代の初づひ

を。よくをもるれ夫ゞ。みゞゝふを。ひて物ゆめゆゝ。ゝるハ。文ル歌
も。いとゝくうほゝるれりのゞかし。

てふちふゝ

といふゝといふゝゝ。ゆゝハゝゆふよりて。てふをいひ。家紫ゆゞゝりハ。
ちふゝゝとゝふゝ多ゝいつる。旨といふをつゞ。文をいをゝぶ俗
おゞふて。いづゝも河し。ゝうを迄きこ。古学ゆ事。俗乃ゝひ
て物る給ゝゝむこて。ハ文ゆゝ。ゝいふべき本をバ。ゝ。をべて旨
てふ又ちふゝかゝハいゝゆゞゝきゝゞ物を。よひて。ゝ思ひて
や。中古ゆ物の文ゆゝへ給かゝ人おゝき。ゝハゆふゆゞゝ。ゝ。こ
ゝハ。ゆの河ゝ。ゝを行ゝ。文ゆハ。古。より俗おきて物をバ。古歌ゆ
も。をべく。をべき河ゝうゝび。中古の物ゆハゝゝし。但。ゝ。ゝ。

〇ものをてふ人うえ・ものをてふ何をうえ・おどやうふいつてこそはれ
まをこそうえ・まをどこまを・ものをてふ菜・定まれるおもてうえ
物をちしていつるおもをば・おべべの伽よハ引べきふうべ。

〇ゆ

〇よりをといふこそ・茶茶おどのうみハ・ゆをもよりをもあるえ・これ
よりて・近きこうの人・文をも・よりをといふべき不を・皆ゆをかくハ・
ろし・古・を・ふをそうをも・文をハ皆よりをもいひ・ゆをよりをいをる
こをおし・物をを古をのの事・ゑををこかやうれ耳なるをぬ何をぬ
こて・多くかくハいをんづきおく・こをぐ・うをこ。

〇と

〇茶書ふいをく・こをいうを・彩人の語をるハこ・語をるをかく

のめく・上よいをく・をひ・或を語をるハ・などやうふいひても・其語
の終をふ文をいうを・終りをを・あどいぬぞ・むう・此文の定をうをを
流・結をを付て・後の人の文をは・上よいをく・ひて・終をふ文をいうを
あどいふをバ・ほど・をを主をうて・をづうく・拾・をや思をん・終り
をバをどうをのをいひく・流の語へうをハ・長をんのなぬちうらに
て・古の伽よをぬづるのををを・そのををて・流の語へもうをがを
く・をどををもおうがをを・をみ・をき・ゑがをを・をべ・近き
て・後の人・文をおををぐ・ものをよをこを・仏ををめ
をど・ちて・中・ふをぶきをして・語のをのハぬを・此教をうも
特おわきぞう。・漢文ヨリ出ル云々トシテ・を語の終りをトを陪をを
をみつきをうを・こを・古の語の格こをも近きをのををを・おき例ををハトイフを
行をを・ふをを・ひて・ひをて・ををべきふうぐ。

から

古今集序に初春の門よりいでゝ若菜摘むとて雪
ひらるゝ野にまじりぬとかゝれたり。五月はいとはあつさ
ひるまをもとめて水無月の十日ばかりふるゝ。又ひぐらしの鳴音
がむまれにたゝみ寄るを。恨むるかたりてうた。こゝろのうちをあら
ぶしのをりゝ。今の人の文をまゝ必ずがといふ所をやうの所をが
といつるとも。やゝむかしの面ふしもそしらぬ。たゞのよに文をば皆を
といつて。御こゝろ今時の人さかやうに所をといふべきことをばまさ
きまきらびて。皆がとのといふを。雅(ミヤビ)俗(サトビゴト)に近しこゝを
言ふ初出。又こゝろ猛(サヽ)くの文をもつゝふよく行るこゝろにたゞく
べし。はがりゝ一つまて。大うこゝを文のつゝかをもこゝろぞし。

こゝろべくがといふ初を別ふつゝひぞこゝろ行るとたのめくる所よハつゝハ
ねてこゝし。そのきゝめ代いそむよハいとるもゝをバめゝしつ。古へ
よに文ゝとをよくえて。ゆゝゝひ初べし。

よりて

よりてハこゝのこゝふよりてこと上よ何ゝてゝつゝをいつゝこゝ何乃
頭よゝゝよりてこいつゝと所ゝこゝ上所ゝ語をバ切て次ゝ語
をかゝていつゝきハこゝをふよりてこいつべし。しゝくゝむ上ゝつつ
づ言ていつゝ所ゝ月も言ぬゝふよりてゝおどりぬゝいつゝを上を切て
いつゝきハ月ともぬこゝをふよりてやどりぬゝいつゝゝびゝ所ゝ
を返きこゝろの人ゝ月ゝ月ゝをとゝぬよりてやどりぬゝやゝふ上乃
語の切ゝこゝる不よ。よりてゝいつゝ。俗文ぬゝの初ゝをこゝ俗

の須づひよるべうの。

ゆゑゆゑ

ゆゑふも。よりてとゆゑ義をもて。上を切りておくていはく

きハこのゆゑふとも。ちるゆゑよりたいはべし。詞のかしらふ〻ぐうし

ゆゑよりとハいふべきふうにて。古文そハ語のかしらふてハかりといひて故字を書とも。又俗文よ句のかしらふある故字ハ

昔よりかるゞゆゑふと訓ミ其ほかこゝもとかゝ俗がゆゑふ〻つかてし。やうふよ

多るも。倍のうらふ〻ぐふゆゑよりハいふまできがゆゑし。其ハ俗文をよむよりか

く須のつゝひざるを。ぐ〻ぐふ。今の

ぐみづうにそうにうざうき。

のゝ

のゝとハ。ぐこと。其事ぢうふして。ふうの物ふうの事ぢまぐう

ぐ俗いふ須ある。近きころの人乃文ふハ。さとかゝぐで。ぐ

倍の勢ひよ。のみゝいひとぞむ。て多きハ俗文よたゝへるひゞ

あとし。大うゝ皇国の語よハ。さやうふのゝといひて。そぐむる俗ハ

かきてし。古き文ふ〻ぐ一重のゝ〻ぐ一人のゝ。ゐどそぐ先しゐる

うゑぐ。こゝゝハ一重よ限る。一人よかぎりて。二つかきといふそて。

ぐ倍の勢ひ。ふ俗ふるよハ。うゝねぐ。別ふく。

かつ

かつ。ぐ。ぐ。ぐ

なゝしひて。皇國の文字を。□まさしといふべき所。そのうへ□といふべきを。そゝ後おどろと。うつといふて。近きてゝ多し。然いひてもやまるやゝ所をぞと。そゝとも又うは近き所の清文訓ヨミ多もゝ多ゞ耳よゝそ行き。さべて言のなゝひして。やゝぬゝとも。耳所をぬもバ。さてしやゆゝ和ぞかゝ。

いやゝ

□いとゝ高し。□いとゝ行つし。あどいふい□いとハつゝひやうの行る和じゝ高へ

だいとゝ高し。□いとゝかゝ。所どいふハよゝ高し。然を同じ和行ゞ

そゝとを。□いとゝ高。□いとかゝ。ひゝとゝいひゝハゝろきし。高るかゝ。

といふゝきハ。□いとゝ。□所どいふし。他の和ぞとふいふをも。と

の高ゝ八所し。むゝどふ所を。□いとゝ。ゝれきふべし。□いとゝ

とハゝとハ同じき況。つゝひやうハかく異なゝと。行ゝ。ゝべく同ゝと

ゝる和し。ゝゝひゞゝハかゝやうふゝゝぢを行ゝゝ。異ひゝゝひ

ゝを和ゝかくべきし。今ゝ人ゝ此ゝぢめをゝゝ。□いとゝいひてハ

ゝろき所を。□いとゝとゝひて。こゝろきゝと行ゝまぐゝ行ゝ。

文と文の和の差別

あゝよゝ同じき雅ゝ中ふし。文の和と文の和と。差別行ゝぶ

行ゝを。今の人ゝ此差ふゝくして。文ハ行ふまじ

を。文ゝつゝふゝとかゝ。仏ゝべし。ぬゝぐゝ花ふゝゝゝとゝいふハ所

和し。文ハゝぐゝ。□いふべし。車況小車□ふゝ和し。文ハゝぐ

車といふべし。ゝゝよぬゝて□といふゝ和し。文ハ歌ふけてゝいふ

べし。あゝぐきゝ。□ふハ所和し。文ハぬゝとゝいふべし。かやう

のゐどいと多し。今ハ思ひ切るまゝふ。こゞ二つ三つを引ぬつ。但し。
文ハ。さゝぐ。ゆ。ゆ。を。て。序ゐどゝまほゝふ。或ハ花詞をおき
ゆゞして。さべゝ。ゆ。ゆ。詞を花やゝふ。ゝつゝやゝうもあゝと。そば
その文のゆりかゝるゝ。文をべてハ。ゆ。文の中ゐと。るふゝう
ていハ。一ゝ二ゝ詞をゐとゝふまゞふゝやゝゆゝ。ゝ。ゆゝ。ゝ。ゝ。
ゝのこまゝゆゝるゝ。ゆゝまでハ。ゝやゝ。ハつゝ。ゝ。ゝ。文ついでゝ
ゝゝバ。ゐゐゝゝ。ゝゝいふべゝ。今ハ。ゞ。ゝゝゝゐどゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ。

せゝゝゝ文の詞

今の人。情ゐ文を雅てかゝゝゝ。ハ。ゝゝゝ

ても。俗語をかりてことを多くはべれば。古のをよく考へてかくべし。今の人の文をハ。ひるゝのゑがてめいと多きぞかし。

偽文物語の文

近世人の文よ。おとゝ〳〵ふ偽文のふりをなして。多くかきまぜふるものよう。係るきらぎしそハ物雅文をえざるかゝはるとざふてつゝかをまぎ〳〵かくんそしぞそもきとゝの偽文をのぐの顛倒助字はふきやゝ。ゐど。ゐくるとゝもつゝくとゝろきたと。彼字をもてハさやうはそぢ。ゐもかいゝびきぐ。彼字書にしる偽文の軍書やゝの和をえてしかゝ。偽ゝるざ形はバいとゝるやとくして。偽人の再よハ。和〳〵しく。物ゝるとゝをきて。ゆゆゝとゝゆきたるゝふ思ふゝるふいとゝんぎゝとわきゝるざゝるゝどや。芳はゝき文よハゝとゝひまゝ〳〵ふりゝろゝ〳〵ぬこ形ゝるゝびかゝるゝ。おとゝたきハゝゝはゝふゝとふゝそ和〳〵ゝゝれ。うゝこのゝゝはゝきゝふハ。かゝるゝゝわゝ。又字ゝは和ゝゝゝとゝぶゝ。そゝとゝゝつゝひゝゐつゝぐゝまゝざゝるハゝゝはゝ和ゝとゝゝるゝゝや。

時代のゆゝとはゝとゝびゝ

今はゝ人の文ゝ時代のゝゝきゝよゝゝゝゝ。中昔のゆゝり形ゝ文ゝゝ。ゝゝ良ゝゝゝおゝの和ゝゝゝゝ〳〵ゝまゝゝ。又ゆゝゝ和ゝゝり形ゝ文よ。むゝゝゝゝ近ゝゝ世入和ゝとゝまゝゝゝとわゝゝゝゝ

寛政四年壬子春發行

勢州書林　松坂日野町　柏屋兵助

京都書林　二条通柳馬場東入町　林伊兵衛

寺町通四条上ル町　錢屋利兵衛

本居先生著述書之内板行出来

松阪　文海堂
皇都　華箋堂

字音かなづかひ　全部一冊
是ハ本朝の字音の事を委細ニ論ドいろくの考へホ有るなり

漢字三音考　全部一冊
是ハ呉音漢音并ニ唐音のことを論ド附録ム音便の格のくりくりくわり

玉鉾百首　全部一冊
是ハ古のたの意と古風の可百首ホ詠れり

國號考　全部一冊
是ハ国号の訳とくいく考へしるしたる

真暦考　全部一冊
是ハいまだ異國の暦法の流り来るぶくいたる上古の年月日の定めを考へしるしたる

菅笠の日記　全部二冊
是ハ吉野花見の時のたゐ記なり

言葉の玉緒　全部七冊
是ハてふとのみを委くしるしたる

てふとは級墳　折本一冊
是ハてふとの定まりを図ニいふくしたる

大祓詞後釋　全部二冊
是ハいと古き中臣祓の注え

玉ほうき　全部一冊
是ハ行并ニ文の用ニ近世ハ必て誤り来るなを正ニ又ハ[illegible]用と教へたる

神代紀うぶすな山蔭　全部一冊
并代巻をむ解とうるしたる　新刻出来

玉鉾百首解　全部二冊
門人稲掛大平作　新刻出来

寛政十一年己未初秋

發行書林

勢州松阪日野町　柏屋兵助

京都寺町通四条上ル町　錢屋利兵衛

文淵閣三年八百八十二